

| | |
|---------|-------------------------------|
| 氏名 | 齋藤 崇志 (サイトウ タカシ) |
| 本籍 | 東京都 |
| 学位の種類 | 博士 (老年学) |
| 学位の番号 | 博甲第 78 号 |
| 学位授与の日付 | 2016 年 9 月 3 日 |
| 学位授与の要件 | 学位規則第 4 条第 1 項該当 |
| 学位論文題目 | 基本的日常生活活動動作の自立度と困難感を評価する指標の開発 |

| | | |
|--------|--------------|-------|
| 論文審査委員 | (主査) 桜美林大学教授 | 新野直明 |
| | (副査) 桜美林大学教授 | 芳賀博 |
| | 桜美林大学教授 | 渡辺修一郎 |
| | 信州大学教授 | 百瀬公人 |

論文審査報告書

論文目次

| | |
|---|---|
| 第 1 章 序論 | 1 |
| 1.1 研究の背景 | 1 |
| 1.2 本研究の目的 | 1 |
| 1.3 本論文の構成 | 1 |
| 第 2 章 第 1 研究—基本的日常生活活動動作の自立度と困難感を評価する指標の開発— | 2 |
| 2.1 目的 | 2 |

| | |
|--|---|
| 2.2 方法・対象・統計解析 | 2 |
| 2.3 結果..... | 3 |
| 2.4 本研究の考察とまとめ | 4 |
| 第3章 第2研究—FUNCTIONAL INDEPENDENCE AND DIFFICULTY SCALE の相対信頼性と絶対信頼性の検討— | 5 |
| 3.1 目的..... | 5 |
| 3.2 方法・対象・統計解析 | 5 |
| 3.3 結果..... | 5 |
| 3.4 本研究の考察とまとめ | 5 |
| 第4章 第3研究—FUNCTIONAL INDEPENDENCE AND DIFFICULTY SCALE の妥当性の検証..... | 6 |
| 4.1 目的..... | 6 |
| 4.2 研究3-1..... | 6 |
| 4.3 方法・対象・統計解析 | 6 |
| 4.4 結果..... | 6 |
| 4.5 研究3-1の考察とまとめ..... | 7 |
| 4.6 研究3-2..... | 7 |
| 4.7 方法・対象・統計解析 | 7 |
| 4.8 結果..... | 7 |
| 4.9 研究3-2の考察とまとめ..... | 7 |
| 第5章 結論 | 9 |

引用文献

論文要旨

背景と目的

基本的日常生活活動(Basic Activities of Daily Living; BADL)動作に伴い困難感が生じている在宅高齢者は、困難感が生じていない在宅高齢者よりも生活機能が低下し、かつ、将来の施設入所や死亡のリスクが高いと言われる。そのため、BADL動作の自立度と困難感を評価する指標は、BADL動作への介入効果指標や健康上の有害事象の発生リスクが高い高

齢者のスクリーニング指標として活用されることが期待される。しかし、既存の自立度と困難感を評価する BADL 能力指標は、日本の高齢者の生活習慣を反映した評価項目で構成されているとは言い難い。そこで、日本の高齢者の生活習慣を反映し、BADL 動作の自立度と困難感を評価する新たな指標を開発し、その信頼性と妥当性を検証することを目的とした研究をおこなった。本研究は、在宅高齢者を対象とした実践活動や研究活動において活用可能な、新たな BADL 能力の指標の開発につながると考えられる。

研究の概要

以下の 3 つの研究を実施した。

研究 1 在宅高齢者に対する医療、介護、福祉の専門家 6 名による修正デルファイ法、ならびに、5 名の在宅高齢者に対する予備調査から、BADL 動作の自立度と困難感を評価する新たな指標を開発し、その内的整合性を検証した。また、新たな指標を用いて、BADL 動作の自立度と困難感の有症率を調べた。その結果、14 項目の BADL 動作から構成される新しい評価指標 (Functional Independence and Difficulty Scale ; FIDS) が開発され、良好な内的整合性を有すると考えられた。BADL 動作の自立度の有症率は 0.2~2.0%であったのに対して、困難感の有症率は 0.8~7.8%であった。

研究 2 在宅要介護高齢者 47 名を対象に、FIDS の信頼性を検証した。カッパ係数、級内相関係数の値から良好な相対信頼性を有していると考えられた。FIDS の誤差範囲は、測定値の解釈における基準値として活用可能と考えられた。

研究 3 FIDS の妥当性を検証した。FIDS は、代表的な BADL の指標である BI (Barthel Index)、高次生活機能の指標である老研式活動能力指標、健康関連 QOL の指標である SF-8 に対する併存妥当性を有すると考えられた。また、FIDS は、BI と比較して、多様な健康関連 QOL と関連し、かつ、天井効果の影響を受けにくいと考えられた。また、運動機能 (筋力やバランス能力、柔軟性、歩行能力) と FIM (Functional Independence Measure) に対する併存妥当性も確認された。

結論

日本の高齢者の生活習慣を反映し、BADL 動作の自立度と困難感を評価する新たな BADL 能力の評価指標である FIDS を開発した。FIDS は信頼性と妥当性を兼ね備えた指標であり、在宅高齢者を対象とした医療、介護、福祉などの実践活動や研究活動において、活用可能な BADL 能力の指標であると考えられた。

論文審査要旨

提出論文について、主査および副査による数回の面談あるいは書類による討議が実施された。困難感という主観的側面を考慮した自立度の評価は、高齢者がより快適に生活するために重要な視点であり老年学的に意義のあること、また、既存の研究が少なく独創性の高いことは、十分に評価できる研究であると判断された。

調査票の自記式での利用可能性検討を深めてほしいという今後の研究についての希望が出された。

最終的に、本論文は博士論文としての水準を満たしているという判断がなされ、合格と判定された。

口頭審査要旨

審査委員より、困難感を考慮した自立度の指標は、より現実に即した自立度評価を可能にする点で利用価値は高く、老年学的にも社会的にも意義のある研究という評価がなされた。

口頭試問では、FIDS と FIM の天井効果の比較、既存の海外指標との関係、outcome 指標として用いる場合のカットオフ点の見通しなどについて質問があったが、今後の予定も含めて適切な回答、対応があった。

また、審査委員より、FIDS を自記式で利用できるように工夫と確認作業をしてほしい、国際的な利用も目指してほしいという要望があった。

最終的に審査委員の全員一致で合格の判定がなされた。